

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 7 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26350718

研究課題名(和文) スポーツ実践における他者との交流による人間の生の経験の身体教育への応用

研究課題名(英文) Human live experience through the interaction with others in sport practice and its application to physical education

研究代表者

畑 孝幸 (HATA, Takayuki)

岡山大学・教育学研究科・教授

研究者番号：00156332

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：スポーツ実践における人間の生の経験が人間的な存在への問いと不可分であるという認識に立ち、児童・生徒の「心と体」の問題の解決に向けて、スポーツを教材とする体育に何ができるのか、その人間形成の可能性について検討した。スポーツにおける「他者との交流」や「コミュニケーション」から得られるわれわれの多様な生の経験を、体育という人間形成の営みに取り込むことで、児童・生徒が直面する「心と体の問題」解決への方策を提示することができる新たな体育論の構築を目指す。そのため、人間的な実存レベルでの問いかけを哲学的人間学の立場から行いながら、「スポーツにおける人間の生の経験」の身体教育への応用について考察を行った。

研究成果の概要(英文)：Human lived experience in sport practice is inseparably related to the question of human existence. What is possible for physical education using sport as teaching materials to solve the mind and body problem of school children? We considered its possibilities aiming at character-building. We aimed to make a new physical education theory that is able to give a solution for the mind and body problem of school children, taking the various human lived experience through the communication and exchange with others in sport practice into character-building such as physical education. Therefore we considered how to apply human lived experience in sport practice into physical education by asking the question of human existence from the viewpoint of philosophical anthropology.

研究分野：体育学

キーワード：体育 人間形成 スポーツ実践 身体性哲学 哲学的人間学

1. 研究開始当初の背景

(1) 学校教育の現場には出口の見えない難問が山積みである。かねてから「いじめ」や「暴力」が原因で児童・生徒が死に追いやられる悲惨な事件が繰り返し起こっており、体育が関連するところでは、運動部活動において児童・生徒を死に至らしめる悲惨な事件も後を絶たない。このような状況に置かれた児童・生徒は、学校における同級生や教師、すなわち他者との共感や人間的連帯を経験することができず、自らの学びを阻害されるため、「生きる力」を身につけることができなくなっているのではないだろうか。こうした教育の荒廃の背後にある「心と体の問題」に対応するために、体育は「心と体の密接な関連」という理念を追求することによって、児童・生徒が直面する問題状況の打破に貢献しようとしてきたはずである。しかし長い間、実際の授業における具体的な実践の場面では、何をどう指導すれば「心身の関連」が実現されるのかという戸惑いがあったことは確かである。「心と体を一体として捉える」、「自分や仲間の体や心の状態に気付く」、「そういう場合の「捉える」ことや「気付く」ことについての哲学的問題の検討も不十分なままに残されてきた。このような現状において、果たして体育に何ができるのか、それを明らかにしたいと思ったのが本研究の動機である。

(2) これまでの歴史をたどると、体育は、常に社会的要請を受け入れながら人間形成に貢献してきた。わが国でも、スポーツの人格形成の可能性を体育に適用する試みが早くからあった。心身の調和が取れていて、徳を身につけた人間の姿が、体育で目指すべき人間像として描かれている(島田, 1926, p.23)。体育は、道徳の立場から「客観的存在としての人間を、最も健全なる状態に発育させる意

識作用」(大西, 1926, p.64)であり、「身体運動によって価値を創造する作用」(大西, 1926, p.64)であると考えられてきた。このような考え方は現在にも引き継がれている(友添, 2009, pp.313-315)。友添(2009)は、体育における人間形成は、スポーツ文化を媒体にして、体育という営みの中で、「体育教師が学習者を対象に一定の価値的な人間像を目標にして、学習者のうちに社会性および道徳性が形成されるように働きかける営み」(p.313)だと述べている。

欧米では、道徳教育との関連から、体育の教材となるスポーツは人間にとって価値のある実践であると捉えて、スポーツを教育に取り入れようとする考え方がArnold(1997)によって提唱された。スポーツにおける達成を哲学的人間学から解明したLenk(1983, 1985)による研究は、それ以前から注目を集めていたところであるが、200年に入り彼は、これらの成果を踏まえて、スポーツの達成を人間形成と結び付けて捉える研究(Lenk, 2002)を行っている。

このような状況において、スポーツの危機を達成の次元からとらえる研究が関根と畑(Sekine & Hata, 2004)によって行われた。それが一定の評価を得たことがきっかけとなり、その後われわれは「スポーツ実践」、「人間の生の経験」、「他者との連帯」、「人間形成」をキーワードとする研究成果(Sekine & Hata, 2012; Hata & Sekine, 2013)を世に送り出すことができた。しかしながら、スポーツ実践で生じる人間の生の経験を、スポーツを教材とする実際の体育の授業場面において、児童・生徒がどのように積んでいくかということについては、いまだに深く掘りさげて追究することができていない。

2. 研究の目的

本研究では、スポーツ実践における人間の生の経験が人間的な存在への問いと不可分であるという認識に立ち、児童・生徒の「心と体の問題」の解決に向けて、スポーツを教材とする体育に何ができるのかということを検討し、新たな体育論の構築を目指した。スポーツにおける「他者との交流」や「コミュニケーション」から得られるわれわれの多様な生の経験は、体育という人間形成の営みに取り込まれることで、児童・生徒が直面する「心と体の問題」を解決するための方策を提示することができるのだろうか。本研究では、人間の実存レベルの問いかけを哲学的人間学の立場から問い続けることによって、「スポーツにおける人間の生の経験」を体育に応用することができないかということを考察しようと考えた。

3. 研究の方法

(1) 本研究の方法は哲学的人間学の立場の成果を踏まえて、スポーツ実践に代表されるスポーツ現象を観察し、その結果を解釈するというものである。運動やスポーツにおける人間の生の経験は、人間をヒトという客体として捉える自然科学的立場からは、十分に問うことができない。本研究では、「心と体の問題」が人間存在自体への問いと不可分であるという認識に立ち、人間を総合的に捉える学である哲学的人間学の立場から、運動やスポーツにおける人間の生の経験とは何かを明らかにしようとしたものである。体育における人間形成の意義や、体育が教材とする運動やスポーツの教育的価値についても考察を試みた。

(2) 本研究は3年の期間を設けて行った。1年目の平成26年度は「自己の心身を一体として捉える」とはどういうことか、「他者の体や心への気付き」とは何かというこ

とを明らかにしようとした。2年目の平成27年度は、前年度に引き続き、自己並びに他者の身体について考察した。3年目の平成28年度は、「いじめ」や「非行」の被害に直面する児童・生徒に対して、体育に何ができるのかということを考察した。

(3) 本研究の方法が独創的な点は、スポーツ実践の意味を人間の生の経験から問うことにより、あるいは教育における人間形成と関連させながらスポーツ実践における人間の生の経験が体育に対して持つ意義を明らかにしようとしたことである。これは体育学やスポーツ科学の分野では本研究以外にみられない。

4. 研究成果

(1) 「自己の心身を一体として捉える」こと、「他者の体や心への気付き」について、文献をレビューして考察した結果、それらは自分自身の内面におけるコミュニケーションや他者とのコミュニケーションと深く関わっていることが明らかになった。スポーツ実践における人間の生の経験は、他者の存在について配慮したり、他者の身体に注意を向けたりすることを通じて、人間形成を図ることによって得られる可能性があることが示唆された。

(2) 人間の生は自己に関わる事柄のみで構成されるものではなく、他者との関係からも構成されることから、スポーツ実践におけるわれわれの生の経験が他者とのコミュニケーションを充実させることを示唆することができた。

(3) スポーツ実践における人間の生の経験とは、他の誰にも体験されることのない独自の経験でありながら、自分一人だけではなく、他者も関与していることよって成り立つという極めて独特なものであり、それゆえに他者との共感が生じることが明らかにされた。

(4) スポーツ実践における他者とのコミュニケーションは、自己の身体的達成や他者との連帯に向けた身体的行為によって可能になることが明らかになった。体育では集団によって具体化される意味の存在が重要であり、体育の教材であるスポーツの実践においては、われわれの生の経験がもたらす意味の共有が重視されなければならないことが明確になった。

(5) スポーツ実践における「他者との交流」や「コミュニケーション」から得られる多種多様な生の経験を、体育という人間形成の営みに取り込むことによって、児童・生徒が直面する「心と体の問題」解決の方策を提示できる可能性を見出すことができた。

(6) スポーツを実践することの人格形成の意味との関連から、スポーツ実践における人間の生の経験や、スポーツの教育的価値を再確認することができた。それは、スポーツを教材とする体育でなければ成しえない人間形成の意義を明らかにすることにつながり、学校教育における体育の存在価値を強固にしたといっても過言ではない。

<引用・参考文献>

Arnold, P. (1997). *Sport, Ethics and Education*. London: Cassel

Hata, T., & Sekine, M. (2013, September). *Athletes' mental and inner satisfaction and their solidarity in modern sport*. Paper presented at the 41st Annual Meeting of the International Association for the Philosophy of Sport. September 4-8, Fullerton, CA, USA

大西 要. (1926). *教育的體育學*. 東京: 明治圖書

Lenk, H. (1983). *Eigenleistung: Plädoyer für eine positive Leistungskultur*. Zürich: Edition Interfrom

Lenk, H. (1985). *Die achte Kunst: Leistungssport - Breitensport*. Zürich: Edition Interfrom

Lenk, H. (2002). *Erfolg oder Fairness?: Leistungssport zwischen Ethik und Technik*. Berlin: Lit

Sekine, M., & Hata, T. (2004). The crisis of modern sport and the dimension of achievement for its conquest. *International Journal of Sport and Health Science*. 2, pp.180-186

Sekine, M., & Hata, T. (2012). What we can get in sports: Between victory and achievement. *Portuguese Journal of Sport Sciences*. 12 (Supl.), pp.164-166

島田正藏. (1926). *體育原論*. 東京: 大同館書店

友添秀則. (2009). *体育の人間形成論*. 東京: 大修館書店

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計5件)

Hata, T. (2016, November). *Eastern philosophy of sport: Japanese way of thinking and its connection to sport*. Paper presented at the 8th conference of the International Society for the Social Sciences of Sport. November 15-18, Isfahan, Islamic Republic of Iran

関根正美. (2016, September). *スポーツにおける共感と持続可能な共同体*. 日本体育・スポーツ哲学会第38回大会. 9月10~11日, 千葉大学(千葉市)

Sekine, M. (2015, September). *Olympics and peace: Structure of individualistic solidarity*. Paper presented at the 43rd Annual Meeting of the International Association for the Philosophy of Sport, September 2-5, Cardiff,

Wales, UK

Hata, T., & Sekine, M. (2014, December). *What we can get from losing in sporting competition: In defense of excellence and achievement*. Paper presented at the 6th conference of the International Society for the Social Sciences of Sport. December 4-6, Kaunas, Republic of Lithuania

Sekine, M., & Hata, T. (2014, September). *Anthropology of solidarity: From defeat to existential solidarity*. Paper presented at the 42nd Annual Meeting of the International Association for the Philosophy of Sport, September 3-6, Natal, Federative Republic of Brazil

〔図書〕(計2件)

関根正美. (2016). 体育における人間形成. 友添秀則, 岡出美則(編著), *新版 教養としての体育原理:現代の体育・スポーツを考えるために* (pp.34-39). 東京:大修館書店

Ilundain-Agurruza, J. & Hata, T. (2015). Eastern philosophy. In M. McNamee & W. J. Morgan (Eds.), *Routledge Handbook of the Philosophy of Sport* (pp.98-114). London: Routledge

6 . 研究組織

(1)研究代表者

畑 孝幸 (HATA, Takayuki)
岡山大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号 : 0 0 1 5 6 3 3 2

(2)研究分担者

関根 正美 (SEKINE, Masami)
日本体育大学・体育学部・教授
研究者番号 : 5 0 2 9 4 3 9 3

(3)研究協力者(海外共同研究者)

ハンス レンク (LENK, Hans)
カールスルーエ工科大学・名誉教授